

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520842

研究課題名(和文) 移民と国民統合の歴史における米仏比較

研究課題名(英文) the comparison of US and French history in terms of immigrants and national integration

研究代表者

松本 悠子 (Matsumoto, Yuko)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：30165914

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：近代において、同様に移民国家、多様な人種を国境内に包含する国民国家であるアメリカ合衆国とフランスを比較して、19世紀後半以降の国民化の過程で移民あるいは人種は人種がどのように包含あるいは排除されたかを比較する研究である。具体的には、主に第一次世界大戦の主戦場の一つのフランスに焦点をあて、イギリス軍とフランス軍による中国人労働者の導入、フランスのアフリカ及びインドシナ植民地からの労働者や兵士の徴用、さらにアメリカ軍のアフリカ系アメリカ人の戦場での管理を通して、国家の境界を越えて共通する人種意識の構築過程が見られたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In the 19th and the early 20th century, both the United States and France integrated the nation states while receiving immigrants. At the same time, both countries had nonwhite races within the national borders. It is often discussed that racism and anti-immigrant nativism were constructed in the process of the national integration. Focusing on the French battlefields during the World War I, this study discusses how racial consciousness or racism of French, British, and American armies as well as French society was constructed while dealing with laborers from China, soldiers and laborers from French and British colonies and African American soldiers. It can be concluded that racial contacts in various levels constructed racism and racial consciousness in the global context beyond national borders.

研究分野：西洋史

キーワード：近代史 アメリカ史 フランス史 人種 移民 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

アメリカ合衆国とフランスは、ともに「自由」、「平等」、「民主主義」といった「普遍的」と言われる理念を国是として、19世紀以降、国民国家としての歴史を紡いできた。と同時に、両国は、近代において多くの移民が流入してきた移民国家であり、移民をどのように国民とするか、あるいは排除するかという問題を両国は共有してきた。さらに、フランスは植民地の歴史を背景に、またアメリカ合衆国は奴隷制とアジアやラテンアメリカからの移民の流入の結果として、非白人人種を国境内に抱えてきた。しかしながら、両国の国民統合の理念と実際の歴史、とりわけ国民の成員として非白人人種や移民をどのように位置づけるかという問題に関する歴史は、大きく異なっている。それはなぜか、また理念と実態においてどのように異なってきたのかという疑問から研究を始めた。

ただし、このような大きな課題における米仏の比較は、容易ではない。当然のことながら、それぞれの国の国民統合、人種問題、移民などに関しては、それぞれの国の研究者によっても日本の当該国の歴史を研究する研究者によっても多大な研究の蓄積が見られる。「普遍」であるとされる理念に関しては、思想や哲学の分野で多くの比較研究がある。また、歴史や社会学の研究においても、米仏の比較を行いながら、それぞれの国の「例外性」を論じるものもある。ただし、米仏で行われている比較研究の多くは、それぞれ当事国に軸足を置いているため、相手国の状況をステレオタイプ化された視点で考える傾向にある。しかも、政治や思想の歴史に比べると、人種や移民などに関する比較研究は量的にも少なく、ステレオタイプ化する傾向が多い。確かにアメリカ合衆国のフランス史研究の中には、フランス史ではあまり主要なテーマではないフランス国内の人種問題に関して、アメリカ合衆国で行われてきた人種差別の歴史と重ねて論じる研究もある。しかしながら、そのような研究がフランスで受け入れられているかどうか、検討の余地がある。このような研究状況を背景として、本研究では、アメリカ合衆国にもフランスにも属していない外国人研究者の視点から、それぞれの国の歴史を相対化し、国民国家の成員としての国民の有り様を第三者の視点から比較することができるのではないかと考え、研究を計画した。

2. 研究の目的

国民統合の歴史米仏比較をするために、申請時における当初の目的として、大きく以下の2点を明らかにすることを目標とした。(1) 国境に視座を置いて、両国において、国民の資格を定める(あるいは資格がないものを排除する)ために国境がどのような役割を果たしてきたのかを具体的にたどることである。そのために、当初は、以下の2点を行うこと

を目的としていた。パリの移民博物館とニューヨークのエリス島の移民博物館の設立の歴史と展示の内容を比較することによって、移民の歴史がどのような意味を持っているのかを考える。現代のアイデンティティ問題の視座から、両国の移民政策や移民に対する教育の歴史を比較することによって、国民のアイデンティティの構築やシティズンシップの意味を考える。

(2) 第2点目は、抽象的な理念を国是としながら、人種というおよそ国民統合の理念と矛盾する分類が両国においてどのような意味を持っていたかを明らかにすることである。とりわけ、人種主義と日本語で訳される英語とフランス語の言葉は、類似の言葉ながら、その使われ方が異なっている場合が多い。すなわち、フランスでは、むしろ移民排斥も含む排外主義の意味に近く、アメリカでは、「血」の問題に限定される。この違いは、米仏の人種間、人種意識の違いを反映すると考えられるため、歴史的に人種がそれぞれの社会でどのような意味を持っていたかを明らかにする。

3. 研究の方法

上記(1)(2)のいずれの目的に関しても、我が国の研究及びアメリカ合衆国及びフランスの研究者の文献及び論文をまず幅広く収集した。収集した文献から得られた最新の研究動向を把握し、より具体的な研究対象を確定する作業を行った。その成果をもとに、複数のアーカイブスで第1次資料の収集を行った。

上記目的の(1)に関しては、すでに、在外研究と中央大学の特定課題研究費によって、ある程度の第1次資料を収集していたため、分析を行うことに集中した。ただし、当初目的では、現代との直接的な関連に目的の比重があったが、やはり歴史研究として行うためには両国が移民国家となる19世紀後半から20世紀初頭にまでさかのぼる事が必要となった。そのため、平成24年度には、アメリカ合衆国サンフランシスコの国立文書館サンフランシスコ支部を訪問して、19世紀後半から20世紀にかけて、移民であり非白人でもあるアジアからの移民がアメリカ合衆国の国境でどのような経験をしたかを明らかにできる資料を収集した。

上記目的の(2)に関しては、すでに、これまでの研究からアメリカ合衆国の人種と国民統合の歴史に関しては、研究動向を把握していたため、広く人種の歴史に関わるフランスの文献を収集、分析した。その結果、具体的な社会史として人種の歴史を比較する場合、フランスに関しては第一次大戦期が重要であることが判明した。というのも、フランス国民の大半は、第一次大戦期まで植民地の非白人人種に関して情報として持っていたが、実際の接触は限られていた。しかしフランスが戦場となったために、多くの非白人勞

働者や兵士が日常生活の視界に入ってきたのである。アメリカは奴隷制を内包していたために、奴隷解放後も人種の違いに敏感であり、フランスは遠く植民地に非白人が多く暮らしていたため、人種の違いに寛容であったという論考もあるが果たしてそうであろうかという疑問がわいた。そのため、実際に生活の中で異なる人種と接触したことがフランスの人種意識にどのように影響したのかを検討することが重要であると考え、第一次大戦期のフランスにおける非白人の動向を対象とする第1次資料の収集を行った。具体的には、平成24年度にパリのヴァンサンヌにある陸軍文書館、平成26年度にフランスのエクスアンプロヴァンスにあるフランス海外県文書館をそれぞれ訪問し、管理する側のフランス軍の人種意識と、海外植民地などからの非白人兵士及び労働者のフランスでの経験の双方の資料を収集した。また、第一次大戦は、アメリカ軍がフランス本土でわずかの間ではあるが戦った戦争でもある。アメリカ軍の中には、アフリカ系アメリカ人が含まれていたが、彼らに対する「管理」とフランス軍あるいはフランス社会との関わりは、アメリカ合衆国、フランス双方の人種意識を明確にした。第一次大戦期のフランス本土は人種意識に関する米仏比較を実際の米仏関係の中で行うことができるのである。この視点から、アメリカ合衆国についても第一次資料を収集した。平成25年度には、戦場で物資の支給や兵士の福利に携わっていたYMCAのアーカイヴスのあるミネソタ大学を訪問した。また、平成27年度には、ワシントンD.C.の郊外にある国立公文書館において、アメリカ軍の資料と共に同時期のアフリカ系アメリカ人に関する資料を収集した。さらに、第一次世界大戦と人種との関わりを論じるとき、植民地、アフリカ系アメリカ人だけでなく、中国からの労働者の導入が重要であることが分かった。この導入に関しては、イギリス軍も深く関わっていたため、イギリスの第一次大戦と人種に関する文献も収集することとなった。なお、同時期に得た中央大学特定課題研究費によって、ロンドンの帝国軍事博物館のアーカイヴスを訪問して、第1次資料を収集することができた。

4. 研究成果

研究成果も研究目的に沿って(1)(2)に分けることができる。

研究目的(1)の移民博物館に関しては、すでに当研究の開始前の平成24年3月にパリの博物館とニューヨークの博物館に関して比較した最初の論考を研究ノートとしてまとめた。その後も資料の収集及び分析を行っているが、サンフランシスコを訪問したことで、太平洋側の移民受け入れ施設であったエンジェル島の博物館も考察の対象とすることとなった。パリの博物館は創立当初議論が分かれている中で多文化主義を掲げたが、

ニューヨークの博物館と比較すると、フランス人としての同化が流れの中で達成されていることを明らかにしていること、ニューヨークのエリス島の博物館が、移民に対する排斥の歴史をも視野に入れて展示しているが、最終的にはやはり移民の国アメリカを顕彰していることに比較して、エンジェル島の移民博物館は、アジア系移民に対する排斥と抑留の歴史が刻まれている。それぞれの博物館がどのような経緯で創設されたかが、それぞれの成立時の政治事情と移民政策を反映しているのである。今後さらに分析を進めることによって、移民の歴史をどのようにそれぞれの国が捉えているかを浮き彫りにすることができると考えている

研究目的(1)の に関しては、研究方法において論じたように、現代との直接的な関連を論じる前提として、19世紀後半以降の歴史の見直しが必要であることが分かった。そのため、当該期間中は、アメリカ合衆国の国境の歴史の再検討を行った。平成24年度には、アメリカ史学会大会の報告と『アメリカ史研究』の論文において、サンフランシスコ国立文書館サンフランシスコ支部で収集した資料の一部を分析し、国境を管理する過程で、どのような資格がアメリカに入国するために必要とされたか、さらに戦争の徴兵などに明確に現れる国民の資格とは何かを論じた。この時点で、アメリカにふさわしい移民や国民とジェンダー規範との関係に注目したが、さらに、平成28年度には、歴史学研究会大会シンポジウムでの報告で研究を発展させることができた。19世紀後半から1920年代まで、複数回の移民法の改正による法的な変遷にも、また実際の国境管理にも見られる特徴として、人種とジェンダー規範が重要であることが分かった。とりわけ、ジェンダー規範に関しては、同時期のアメリカ国内のミドルクラスの規範、すなわち男女の領域分離、異性愛の同意に基づく結婚などが重視され、働く女性や写真花嫁などのような結婚に関しては、売春目的、あるいは非文明的であると拒否されたケースも多い。国民のあり方が、それぞれの時期の社会規範によって変容し、さらに、非白人人種は文明的ではないという言葉によって国境管理がされていたのである。なお、フランスの国境管理に関しては、研究動向を分析することにとどまっている。同時期のフランスの移民に関しては、圧倒的にヨーロッパ内からの移民が多いが、ヨーロッパ内の民族に関しても、異質な文化を人種化する事例が報告されており、今後さらなる資料の収集と分析を行いたい。

なお、当該研究期間以前からのプロジェクトである、日米の日系人研究の交流がハワイ大学から出版されるに合わせ、研究交流や論文遂行を行った。この研究は日系移民に限定されているが、アメリカ合衆国の研究者との研究アプローチや関心の差異が明らかとなり、移民の比較研究に関する重要な知見を

得ることができた。

研究目的(2)に関して、研究方法でも述べたように、第一次世界大戦を舞台として戦場における人種認識、人種に関する言説を第1次資料から分析した。また、すべての資料を分析し終えていないが、2本の論文にまとめることによって、今後の研究の方向が明確になった。平成26年度の中央大学文学部紀要の論文では、主に我が国の研究動向と米仏の研究動向を分析した。とりわけ、英語圏の研究者が、フランスの研究者の多くがフランスの人種主義の歴史をあまり重視しないことに疑問を持ち、第一次世界大戦時の戦場におけるアフリカ植民地からの兵士の動員、インドシナ植民地からの兵士と労働者の動員、さらには中国からの労働者の導入がフランス本土にどのような影響を与えたかを、軍隊との関わり、非白人労働者とフランス人労働者との関わりなどを通じて論じている複数の論考を紹介した。また、フランス語においても、アフリカ植民地からの動員や中国人労働者に関しての研究はあるが、必ずしも英語圏の研究者の研究との交流があるわけではない。この研究の狭間で、戦場において人種認識がどのように変容したかを論じる研究をする必要性を明確にした。

平成28年度の中央大学文学部の紀要論文では、YMCAの資料を中心に、これまで収集した資料の一部を分析した。植民地からの労働者や兵士に関しては、植民地出身であることによる差別化と人種による差別化が重なるため、両者を峻別することが困難である。しかし、一応植民地ではなかった中国からの労働者とアフリカ系アメリカ人兵士に関する分析を加えることによって、戦場において人種意識が構築された過程を論じた。フランス政府は、イギリス軍ほど厳しく中国人労働者に対応しなかったが、ヨーロッパ内の外国人労働者は移民を扱う部局で対応したのに対し、中国人労働者は植民地出身者を扱う部局が管理したところから、すでに非白人という分類が行われていたことがわかる。また、戦況が厳しくなるにつれて、イギリス軍もフランス軍も中国人労働者や植民地からの労働者を訓練もしないまま前線近くで塹壕掘などに労働に使うなど、戦場における兵士や労働者の階層化が明確になった。それは、アフリカ系アメリカ人兵の大半が労働者として使われたこととも共通する。また、イギリス、フランス両政府共にフランス人女性と非白人兵士及び労働者との親密な関わりを管理しようとしたことは注目に値する。アメリカ合衆国軍のアフリカ系アメリカ人とフランス人女性の関わりに対する厳しい管理ほどではないにしろ、人種の差異に基づく意識は、ジェンダーと深く関わって醸成されていたことが明らかになった。さらに、植民地出身の労働者や兵士とフランス人女性の結婚は、植民地における人種秩序を危うくするというフランス軍や政府の議論は、植民地支配に

おける人種の重要性を再確認させた。

また、本論文から今後の課題あるいは展望も鮮明になった。第1点としては、フランス、イギリス、アメリカ軍当局者の資料をさらに精査することによって、人種意識がどのように作られていたか、さらにジェンダーとどのように関わっていたかを明確にすることが必要であるという点である。人種意識あるいは人種主義がアメリカ合衆国とフランスだけでなく、国民という枠組みを超えたところで20世紀初頭の世界においてどのような意味を持ったかを論じることができるのではないだろうか。第2点としては、人種秩序を非白人側がどのように意識したか、その動きにも焦点を当てる必要性が明確になったことである。アフリカ系アメリカ人運動の指導者であるデュボイスの活動に見られるような国を超えた連帯の動きが、第一次世界大戦前後に見られたことはすでによく知られている。しかし、非白人労働者やアフリカ系アメリカ人兵士の実態を明らかにすることによって、フランスの寛容さを説いたデュボイスの背後にある計算あるいは戦略を再評価できるのではないだろうか。さらに、非白人労働者や非白人兵士の動きを追うことによって、人種の歴史に新たな視点を求めることができる。たとえば、フランス人女性と植民地出身者の結婚による植民地の人種秩序のほころび、労働の現場での民族人種あるいは言語を超えた連帯は、人種によって差異化された人々の意識の新たな動きを掘り起こすことにつながるだろう。同時に、本論文でも戦場の労働の現場での対立や摩擦に触れたが、非白人兵士や非白人労働者、あるいは非白人の知識人の間にどのような摩擦が生じたのかを明らかにすることによって、非白人にとって人種の持つ意味とそれぞれの国あるいは地域に属する意識との間の葛藤を明らかにすることができるのではないだろうか。

いずれにせよ、米仏の国民統合の歴史に関する関心から始まった研究であるが、科学研究費による多様な資料の収集が可能になったために視野が広がり、グローバルな歴史として、人種意識や人種主義の歴史を再検討する機会を得ることができた。この研究をきっかけに、ヨーロッパ史だけでなく、中国史や東南アジア史、あるいはアフリカ史の研究者との対話を広げたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

松本悠子、もう一つの第一次世界大戦(2)―戦場における労働と人種、中央大学文学部紀要「史学」、Vol.62, 2017, pp.85-107、査読なし

松本悠子、もう一つの第一次世界大戦―人種の諸相の米仏比較、Vol.60, 2015年、

pp.47-70、査読なし
松本悠子、第一次世界大とシティズンシップ、アメリカ史研究、35号、2012年、pp.3-20、査読あり

〔学会発表〕(計 3 件)

松本悠子、アメリカ合衆国への移民の流入と性・人種規範の構築、歴史学研究会大会、2017年5月28日、明治大学

松本悠子、第一次世界大戦における人種の米仏比較、京都大学西洋史読書会大会、2015年11月3日、京都大学

松本悠子、racism と racisme-20世紀前半のシティズンシップと人種に関する米仏比較、アメリカ史学会大会、2012年9月23日、一橋大学

〔図書〕(計 1 件)

Yuko Matsumoto, Americanization and Beika, pp. 161-182, in Gary Y. Okihiro and Yasuko Takezawa eds, Trans-Pacific Japanese American Studies, University of Hawaii Press, 2016,

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本悠子 (Matsumoto Yuko)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：30165914

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()